

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 24 日現在

機関番号：23601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592498

研究課題名（和文） きょうだいを亡くした子どものグリーフワークプログラムに関する研究

研究課題名（英文） Grief work programs for children who lost a sibling

研究代表者

竹内 幸江（TAKEUCHI SACHIE）

長野県看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：00311902

研究成果の概要（和文）：きょうだいを亡くした子どもへのグリーフケアのあり方を検討するために、きょうだいのある子どもを亡くした親を対象に面接調査を実施した。どの親も、子どもを亡くした当時は自分自身のことと精一杯で、きょうだいのことを気にかける余裕もなかったと振り返り、そのことを負い目に感じている親もいた。できれば、その時期にきょうだいをサポートしてほしいとの要望も出された。そして、子どもが気持ちを表現しやすいように、親が参加しない子どもだけのサポートグループができることも望んでいた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this investigation was to describe the grief care to children who have lost a sibling. Interview data were collected from parents who have lost a child you have siblings by semi-structured interviews using an interview guide. When parents lost a child, could not afford to worry about siblings because they could not be considered anything other than themselves, and they felt the debts about it. Parents hoped immediately after the child died, to support the siblings. In addition, they wanted a support group that only children to participate because children could tell the feeling obediently.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：小児看護学 グリーフケア きょうだい

1. 研究開始当初の背景

悲嘆（Grief）とは、喪失に関連した怒り、フラストレーション、孤独感、悲しみや罪の意識、後悔などの感情と情動をいう。喪失の中でも死別による喪失がもっとも悲嘆が強

いと予想され、かつ避けられない現象でもある。近年、この悲嘆へのケアとしてグリーフケアが注目され、悲しみが癒されるプロセスであるグリービングを視野に入れたケアを実践している施設も多くなってきている。

小児看護の領域でも、特に子どもを亡くした両親に対するグリーフケアが必要とされ、施設あるいは当事者が主催する「親の会」などで、グリーフワークが行われていることが多い。子どもの死をめぐる **End-of-Life** ケアとしては、このように家族の中でも両親の悲嘆に着目されることが多く、両親へのケアについて研究されることが多い。しかし、家族として祖父母やきょうだいの悲嘆に目を向けられることは臨床の中でも少ないのが現状である。

近年、病気の子どものきょうだいに関する研究も多くなり、特に慢性疾患をもつ子どものきょうだいの場合、きょうだいに起こりやすい問題行動、心の問題などが明らかにされている (太田、2000)。ただし、亡くなった子どものきょうだいについての研究は少なく、喪失に対するきょうだいの反応も子どもの死の概念発達から推測される域を出ていない。きょうだいも子どもであるということから、死をどのように理解できているのか判断が難しいこと、子どもに死について語ることを避ける社会の傾向などから、親や家族と死別体験を共有することができないのが現状と思われる。しかし、筆者の過去の研究成果 (竹内ら、2003) から、きょうだいの死別を体験した子どもがその時の体験を強烈に覚えていること、中にはトラウマとして抱えている場合もあることがわかっている。きょうだいを亡くした子どもは、心の準備もないままにきょうだいの死を受け入れなければならない場合もあり、また自分が知らなかったことや病気のきょうだいへの嫉妬をいただいたことで罪悪感を抱き、悩み苦しむ体験をしていることが予想される。そのような子どもへのケアの必要性が示唆されているが、実際の方法やケアの効果に関する研究はほとんどみられないのが現状である。

2. 研究の目的

- (1) きょうだいを亡くした子どもが、きょうだいの死をどのように受け止め、自らどのようなプロセスで悲しみを癒してきたのか、またどのような親や家族、周囲の人のかかわりがあったのか、親の視点から明らかにする。
- (2) きょうだい亡くなる前も含めたプロセスの中で、きょうだいを亡くした子どもへのグリーフケアのあり方を検討する。

3. 研究の方法

(1) 調査対象者

きょうだいのある子どもを亡くした親。

(2) 調査方法

子どもを亡くした親の会の代表者に対象となる親を紹介してもらい、研究の趣旨ならびに倫理的な配慮を説明し同意が得られた親に面接調査を実施した。

(3) 調査期間

平成 24 年 4 月～5 月

(4) 分析方法

面接内容を逐語録に起こし、研究疑問にそって内容を分類し要約してまとめた。

4. 研究成果

(1) 対象者の概要

調査協力が得られた親は、父親 1 名を含む 4 組 5 名であった (表 1)。子どもが亡くなってから 8～16 年経過しており、事例 B と D は亡くなってから下にきょうだいが生まれていた。

享年	当時のきょうだい	経過
A : 14 歳	兄 16 歳 妹 11 歳	8 年
B : 1 歳 4 月	姉 5 歳 姉 3 歳	8 年
C : 7 歳	弟 5 歳	10 年
D : 1 歳 6 月	兄 3 歳	16 年

表 1 きょうだいの年齢

(2) 子どもが亡くなった後のきょうだいの様子

亡くなった直後は、【母親を気づかい慰めてくれた】【母親が泣くと亡くなった子どもが悲しむから泣くなと言った】など、自分も悲しみながらも親への気づかいをみせていた。3歳児でもこのような言動がみられた。

日常生活の中では、【仏壇にお供え物をあげる】【お供えしたご飯を食べてくれる】【出かけた時にはお土産を買ってくる】【誕生日にプレゼントを買う】【好きだったテレビやビデオを位牌に見せている】などを、ごく自然に行っていた。このことをある母親は【いなくてもいるというように意識して生活している】ととらえていた。

学校生活では、【亡くなった子どもの分まで勉強を頑張っている】【亡くなった兄がやっていた生徒会役員に立候補した】【生きていたら担任の先生は誰かという話をする】と、ここでも亡くなった子どもを意識して行動していた。

対人関係では、【きょうだいの人数を聞かれると亡くなった子どもも含めて答える】【友だちに亡くなったきょうだいがいることを話している】というきょうだいと、【きょうだいの人数を聞かれると「今は一人」と答える】というきょうだいがいた。後者は、その度に亡くなったきょうだいのことを話すのが億劫になり、「今は一人」という答えに対してさらに聞かれると説明するということであった。また、【障がいのある子どもに理解を示す】【いじめられている子どもを助ける】という、弱い立場にある人に対して優しい態度を示すと親はとらえていた。

その他には、【自分で自作の本を書いていた】【母親の書いた手記をくり返し読んでいた】というものがあつた。

(3) きょうだいの様子で気になること

亡くなった直後は、【母親に甘えるようになり片時も離れなくなった】【眠っている時に叫ぶことがある】【亡くなってから行動や言動がガラッと変わった】【親の気を引こうとしてか友だちとトラブルを起こした】という変化に親は戸惑っていた。

その後は、【夜が怖いと言っていた】【独りになるのを嫌がった】【他のきょうだいが危ないことをすると過剰に反応する】【テレビでもショッキングな場面は見たがらない】という子どもの行動を、きょうだいを亡くした状況と照らし合わせてそうなったと思っていた。また、【大人の様子をうかがって行動したり、いい子でいようとする】【いい子を演じてみたり困らせることをしたり極端である】【あまり物事に執着しない】など、その子の性格的な要素も、きょうだい亡くなったことと関連していると考えていた。これらは特に、子どもが亡くなる場面に遭遇したきょうだいをもつ親から聞かれた。

(4) きょうだいは子どもが亡くなったことをどのように感じているか

生前、きょうだいにも病状を話していなかった親は、【亡くなった子どもに何もできなかったことを後悔しているかもしれない】として、親自身も後悔していた。

また、【いろいろと感じながら生活していると思う】【心の中にはずっと亡くなった子どもがいると思う】【子どもが死ぬと親はこうなるんだと思っていると思う】と感じながらも、【亡くなったことをどう消化しているのか気になる】【どんなふうに思っているかわからない】【自分からは話さないのかわからない】と、きょうだいが何を感じているのかよくわからないとしていた。その背景には、【亡くなった当時のことは話さない】【子

どもたちが話さないので言わない方がいいのかと思う】【家族の中では話にくい】という、亡くなった子どもに対する思いなどは家族内で話にくいという状況があった。

(5) 親としてきょうだいに思うこと

【闘病中は亡くなった子どものことを優先してきょうだいには辛い思いをさせた】と、亡くなった子どものことを第一に考えて、亡くなった直後も【自分のことで精一杯できょうだいに目がまわらない】と、自身の悲しみを対処するのに精一杯であり、そういう状況であったことできょうだいに対して負い目を感じたり、自責感を持っていたりした。

しかし、【きょうだいとは一緒に苦しみを味わった仲だと思っている】【きょうだいの存在が支えになった】と、あらためてきょうだいの存在に感謝する親もいた。

(6) きょうだいへの精神的サポート

親は子どもが亡くなった後のきょうだいの気になる行動に対して、【カウンセリングに相談した】【医師に相談した】【きょうだいのサポートグループに参加させた】と、専門家に相談していた。そしてアドバイスを受けて、【母親がきょうだいと一緒に過ごす時間をつくった】【母親が家事に専念してきょうだいだけを見るようにした】【母親が自分の感情を素直に出すようにした】と、何らかの手段を講じていた。しかし、それによって少しの効果はあったとしても、十分に満足してはいなかった。

きょうだいへの支援として望むこととしては、闘病中は【子どもの病気については専門家がきょうだいの心理面を考慮して話してほしい】【入院中から面会に来たきょうだいにもかかわってほしい】【闘病中からきょうだいにも心の準備ができるケアがあるとよい】とし、子どもが亡くなった直後は【き

ょうだいの話を聞いてくれる存在がいてほしい】と、親は自分のことで精一杯なので、誰か話を聞いてくれる人、できれば専門家の人に話を聞いてもらいたいと望んでいた。そして【親がきょうだいについて相談できる相手や場があるとよい】と、きょうだいに対する親へのサポートも望んでいた。また、【きょうだい同士が話したり、気持ちを発散できる場があるとよい】【親がいない場所で子どもたちが自由に話せる場があるとよい】と、子ども同士が交流できる場があることを望んでいた。年齢が小さいうちは、ただ集まって交流するぐらいでいいが、そのままの関係を継続して【きょうだい大人になった時に話をする相手や場があるとよい】としていた。

(7) 考察および成果の活用

子どもを亡くしてから、親ときょうだい間であらためてお互いのその時の気持ち、今までの気持ち等について話したことがある家族はいなかった。しかし、親は子どもがきょうだいの死をどのように受け止め、自分の中でその思いを消化してきたのかを気にかけており、知りたいと思っていた。特に、不慮の事態で、きょうだいの死を目の当たりにした子どもの場合は、その後の子どもの気になる言動を、その時の体験と結びつけて考える傾向にあり、子どもの成長・発達に対する影響は強いと感じていた。また、どの親も、子どもを亡くした当時は自分自身のことで精一杯で、きょうだいのことを気にかける余裕もなかったと振り返っており、そのことを負い目を感じている親もいた。できれば、その時期に親以外の第三者が子どもの気持ちを聞いたり、サポートしてほしいとの要望も出された。そして、親が参加しない子どもだけのサポートグループの方が、子どもも気持ちを表現しやすいのではないかと考えており、

そのようなサポートグループができることも望んでいた。

これらの結果から、きょうだいを亡くした子どもへのグリーフケアの要素として、きょうだいの闘病中から心の準備ができるようにかかわること、亡くなった直後に子どもの話が聞ける存在が必要であること、親のいない場所できょうだい同士が話し合える場を設定することが示唆された。

面接結果から、きょうだいを亡くした子どもへの対応に悩む親も多いことがわかり、そのような親を対象とした知識の提供の必要性を感じた。そのため、グリーフケアが比較的充実しているオーストラリアから、グリーフケアの専門家を招聘し、「子どもたちのグリーフ」をテーマとした講演会を企画した。参加者は約 30 名で、講師の話をもとに活発な意見交換がなされた。参加者からは、「自分が感じていた子どもの気持ちを代弁してもらったようで自信がもてた」「子どもに対して負い目に感じていたが、少し気が楽になった」などの好評価を得ており、このような機会を提供する必要性を再認識した。

引用文献

太田にわ (2000) : 子どもの入院がきょうだいに及ぼす影響とケア, 及川郁子監修: 病と共に生きる子どもの看護, 61-69, メヂカルフレンド社.

竹内幸江 (研究代表者) 他 (2003) : 子どもに対するデス・エデュケーションのためのプログラム開発に関する研究. 平成 12-14 年度長野県看護大学特別研究費補助金研究成果報告書.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

竹内幸江、きょうだいが亡くなる場面に遭遇した子どもをもつ母親の思い、第 36 回日本死の臨床研究会年次大会、2012. 11. 4、京都市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内 幸江 (TAKEUCHI SACHIE)
長野県看護大学・看護学部・准教授
研究者番号: 00311902

(2) 研究分担者

内田 雅代 (UCHIDA MASAYO)
長野県看護大学・看護学部・教授
研究者番号: 70125938
白井 史 (SHIRAI FUMI)
長野県看護大学・看護学部・助教
研究者番号: 30420699
足立 美紀 (ADACHI MIKI)
長野県看護大学・看護学部・助教
研究者番号: 10457905
高橋 百合子 (TAKAHASHI YURIKO)
長野県看護大学・看護学部・助教
研究者番号: 00438178
太田 克矢 (OTA KATSUYA)
長野県看護大学・看護学部・教授
研究者番号: 60295798

(3) 連携研究者

山下 恵子 (YAMASHITA KEIKO)
松本短期大学・看護学科・准教授
研究者番号: 70442168